

主 題：主イエスの黙示

聖書箇所：ヨハネの黙示録 1章1－5節

どうぞ、ヨハネの黙示録1章をお開きください。1：1にこのように記されています。「イエス・キリストの黙示。」と。これがこの書のタイトルです。それが最初に記されています。「黙示」とはどういう意味なのでしょう？「おおいを取る。いままでおおいが掛けられて隠されていたものがおおいが除かれて明らかになる。」と、そういう意味をもったことばです。いままで分からなかったことが今明らかにされる、ということです。このことは神だけが可能です。神はそのような隠れていたことを明らかにすることができる方です。

実は、ダニエルという一人の預言者がネブカデネザル王との会話の中で、神はどのようなお方であるかということをはっきりと明かしています。ダニエル書2：28「しかし、天に秘密をあらわすひとりの神がおられ、…」と、神のことは見事に表わしています。「…この方が終わりの日に起こることをネブカデネザル王に示されたのです。あなたの夢と、寝床であなたの頭に浮かんだ幻はこれです。」、また、2：29にも「王さま。あなたは寝床で、この後、何が起こるのかと思い巡らされましたが、秘密をあらわされる方が、後に起こることをあなたにお示しになったのです。」と、2：45にも「あなたがご覧になったとおり、一つの石が人手によらずに山から切り出され、その石が鉄と青銅と粘土と銀と金を打ち砕いたのは、大いなる神が、これから後に起こることを王に知らされたのです。その夢は正夢で、その解き明かしも確かです。」とあります。つまり、未来のことをだれかに明らかにするためには、未来のことを知っていなければ明らかにできません。未来のことを知っているのは神だけです。

***未来のことをご存じである神だけが、将来の出来事を明らかにすることができる。**

では、何について明らかにされるのか？1節で教えるように「イエス・キリストに関すること」です。「イエス・キリストに関する真実」を明らかにしてくれるのです。主イエス・キリストが語っておられたこと、主がこの地上におられたときに、再びこの地上に帰って来ると言われた、また、さばきについてもお話になった、また、その後、地上で為されること、永遠に為されること、そのような、その当時の人たちにはよく分からなかったこと、それらを明らかにする、それがこのヨハネの黙示録だと教えるのです。

1節にはその後、「…これは、すぐに起こるはずの事をそのしもべたちに示すため、…」と書かれています。

◎「すぐに起こるはずの事」

・「起こるはず」：ここで使われている動詞は、他の箇所ではこのように訳されています。「こうならなければならない」と。マタイ26：54「だが、そのようなことをすれば、こうならなければならない」と書いてある聖書が、どうして実現されましょう。」、マルコ13：7「また、戦争のことや戦争のうわさを聞いても、あわててはいけません。それは必ず起こることです。しかし、終わりが来たものではありません。」、黙示録4：1「その後、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があった。また、先にラッパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声が言った。「ここに上れ。この後、必ず起こる事をあなたに示そう。」、「こうならなければならない」「必ず起こること」「この後、必ず起こる事を」と、これらはみな同じことばです。ですから、「起こるはず」ということばが持っている意味は、

***私たちが避けて通ることができないもの、私たちにとって回避のできごとです。**

ヨハネはそうのように言っています。起こるかどうか分からないというのではなく、必ず起こることだと言うのです。

・「すぐに」：このことばは使徒の働き22：18に使われていて、そこでは「主を見たのです。主は言われました。『急いで、早くエルサレムを離れなさい。人々がわたしについてのあなたのあかしを受け入れないからです。』」と、「急いで」と訳されています。特に、この名詞の前にギリシャ語の en という前置詞が付いたときは「大変短い期間に、非常に短い間、すばやく」という意味を持ちます。ですから、ここでヨハネが伝えたかったことは、

***神のさばきが今にも始まること、そのさばきが大変近いことを表わしている。**

それがまず、この1節で教えられていることです。神が約束されていたそのさばきが確実に来るだけでなく、その日は非常に近いということです。

私たちはいつもそのようなことを聞いたとき、それは本当か？と思います。いろいろな人がいろいろなことを言いますが、私たちが考えなければいけないのは、それが真実かどうか？です。ただの人間の考えなのか？それとも真実なのか？そこで、ヨハネはこの後、彼が語るメッセージが真実であること、

そのことを証明していこうとします。

☆どうしてヨハネが語るメッセージが真実であると信じられるのか？その信頼性は？

A. 神からのメッセージ

ヨハネはまず、これは神からのメッセージだと教えます。

1. この書の信頼性 1, 2 節

1 節の続き「…神がキリストにお与えになったものである。そしてキリストは、その御使いを遣わして、これをしもべヨハネにお告げになった。」、このメッセージがどのように伝わって行ったのかをヨハネは教えているのです。

1) 父なる神からのメッセージである 1 節

* このメッセージは父なる神から出ている。

このメッセージをキリストにお与えになった、父なる神から主イエスにこのメッセージが伝えられていると、そして、主イエスはそれをヨハネに告げるのですが、「御使いを遣わして、」とあり、御使いを介してそのメッセージを主が伝えたと言われているのです。ですから、父なる神からイエス・キリストに、イエス・キリストから天使を介してヨハネにこのメッセージが伝えられたと言うのです。

ですから、ヨハネは「私は自分勝手に好きなことを話しているのではない。私が今記しているこのメッセージは父なる神のメッセージである。」ということを言うのです。なぜ、それが大切なのか？皆さん、思い出してください。主イエス・キリストは「この天地は必ず滅びます」と言われました。でも、その天地が滅びることに関して、ある方を除いてだれも知らないということを話しておられました。マタイ 24 : 35 「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」と言われました。その後、36 節に「ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。」とあります。イエスは終わりに関して、そのことを知っておられるのは父なる神だけだと言われたのです。マルコ 13 : 32 にも同じことが書かれています。「ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。」

また、主イエス・キリストが死んで墓に葬られ、三日後にそこからよみがえって、40 日間人々の前に現われて、ご自分が肉体をもってよみがえった真の救世主であり神だということを明らかになさった、そして、イエスが天に凱旋していかれる前にこのように言われました。「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興してくださるのですか。」（使徒 1 : 6）と尋ねるユダヤ人に対して、使徒 1 : 7 「イエスは言われた。「いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています。」と。

つまり、みな、いつそのことが起こるのか？と知りたかったのです。いつ、滅びが来るのか？いつ世の終わりが来るのか？と。イエスは「そのことはあなたがたは知らなくてもいい。それを知っておられるのは父なる神だけだ。」と言われたのです。ですから、ヨハネが教えるのです。これから何が起こるのか？その最後のさばきについて、これから後のことについて、それを知っておられる父なる神がこのメッセージを与えているのだと。

ヨハネの考えではありません。すべてを知っておられる父なる神からのメッセージをヨハネは記したと教えるのです。だから、これは私たちひとり一人が聞かなければならない大切なメッセージであると言うのです。

2) ヨハネは証人である 2 節

2 節を見ると、ヨハネ自身に関して、彼は証人に過ぎないと言っています。「ヨハネは、神のことばとイエス・キリストのあかし、すなわち、彼の見たすべての事をあかしした。」、ヨハネは「これは神のことばであり、イエス・キリストが私に証されたこと、それを私が記している。ことばで聞き、そして、幻で見て来た。その神のメッセージを私は記したに過ぎない。」と言います。こうしてヨハネは、ここに記されたメッセージが神からのメッセージであり、ゆえに、一人ひとりがこのメッセージにしっかり耳を傾けて、これに心を留めることが必要であること、このメッセージをしっかり覚えてこれに従うことの大切さを教えるのです。

さて、いくつかこの「ヨハネの黙示録」に関して、皆さんに知っていただきたいことがあります。

2. この書の宛先 1, 4 節

いったい、だれに対してこの書が記されているのか？ということです。宛先です。1 節ですで見ましたが「これは、すぐに起こるはずの事をそのしもべたちに示すため、」と、対象は「しもべたち」であると記されていました。父なる神からイエスを通して、イエスが天使を通してヨハネに語り、そのヨハネがしもべたちにこのメッセージを語ると言います。「しもべたち」とはだれか？「しもべ」とは「奴隷」です。つまり、救いに与った者たち、クリスチャンたちです。彼らに対してこのメッセージが与えられ

ていると言います。

また、4節を見ると「ヨハネから、アジアにある七つの教会へ。」と、はっきりと手紙の宛先が記されています。「アジアにある七つの教会」とは、実際に、現在のトルコの西部に存在した教会です。1節には「しもべ」とあり、4節では「七つの教会」とあります。なぜなら、それらの教会を構成していたのは「しもべたち」、クリスチャンだったからです。ですから、その七つの教会のクリスチャンたちに宛ててこの書は記されていると、そのようにヨハネは教えているのです。

3. この書の著者 1, 2節

だれがこの書を書いたのか？1節にも2節にも「ヨハネ」という名前が記されています。9節にも「私ヨハネは、」と、22:8にも「これらのことを聞き、また見たのは私ヨハネである。」と書かれています。ですから、これらはこの書の著者が「ヨハネ」であることを明らかにしています。

では、この「ヨハネ」とはだれでしょう？

◎著者が「使徒ヨハネ」であることの証拠

1) ゼベダイの子

マタイ4:21に「そこからなお行かれると、イエスは、別のふたりの兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父ゼベダイといっしょに舟の中で網を繕っているのをご覧になり、ふたりをお呼びになった。」とあり、ゼベダイの子です。イエスの弟子として召されたヨハネです。つまり、ヨハネの福音書を記し、ヨハネの手紙第一、第二、第三を記したヨハネです。彼がこの黙示録を記したのです。そのことを私たちはこのように黙示録に記されている黙示録自身がもっている証から見ることができます。

2) 彼は七つの教会の間でよく知られていた人物

ヨハネが「使徒ヨハネ」であったという証拠は、彼は七つの教会においてよく知られていたということです。教会の問題を明らかにしていきますが、そのことをヨハネはよく知っていたし、教会もヨハネのことをよく知っていたので、そのような人物でなければならなかったのです。

3) 初代教会の教父たちがそのことを信じていた

大体2世紀に活躍したイレナエウス、アレキサンドリヤのクリメンス、ユスティノス、テルトゥリアヌス、ヒッポリュトス、オリゲネスなどの初代教父たちもこの黙示録を記したのはヨハネであると、そのように信じていました。ダラス神学校の元学長であったジョン・ワルブード師は、この件に関してこのように記しています。「現存する黙示録の最初の注解書は、ヴィクトリヌスによって書かれたが、彼も使徒ヨハネが著者であると考えている。」と。

少なくとも、このような理由によって、このヨハネの黙示録を記したのはあの「使徒ヨハネ」であっただろうと信じられています。

4. この書の著作年代

恐らく、ローマ皇帝ドミティアヌスの晩年（AD81－96年）に記されたと信じられています。なぜなら、この黙示録を見ていくと、教会が様々な迫害を経験していることが記されているからです。たとえば、2:10を見ると「10あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけない。見よ。悪魔はあなたがたをためすために、あなたがたのうちの有人たちを牢に投げ入れようとしている。あなたがたは十日の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。」と、教会の中に苦しみがあったことが明らかです。また、2:13には「わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの王座がある。しかしあなたは、わたしの名を堅く保って、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住むあなたがたのところで殺されたときでも、わたしに対する信仰を捨てなかった。」、ここには殉教者の名が記されています。ですから、教会が迫害化にあったことが分かります。

そして、このヨハネの黙示録を書いたヨハネ自身も、彼の信仰によってパトモス島に流刑されていました。そのことが1:9に書かれています。「私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者であって、神のことばとイエスのあかしとのゆえに、パトモスという島にいた。」と。パトモス島はトルコの西海岸にあるミレトから西南50キロにある小さな島で、ローマ帝国はこの島を犯罪人の流刑地として使っていました。ヨハネはここで幻を見、ここで神からのメッセージをいただいたのです。ですから、少なくとも、このようなクリスチャンへの迫害があったときに、この書が記されていると見るすることができます。

多くの人たちは教会を迫害したのはドミティアヌスだけではないでしょう、あのネロもクリスチャンに対して大変な迫害をしたではないですかと言うでしょう。確かにそうです。ローマにおいて、多くのクリスチャンたちがいのちを落としました。レオン・モーリスという神学者がこのように言います。「しかし、ネロの迫害は局所的であって、短期間のものであった。こうして見ると、広範囲に亘って迫害が行われていたように見受けられる。その点からしてもこれはネロの時代ではないだろう。」と。また、レオン・モーリスは次のような理由も挙げています。ラオデキヤ教会の件です。3:17を見てくださ

い。ラオデキヤ教会の様子が記されています。「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」、つまり、ラオデキヤの教会は非常に豊かな教会だったのです。自分たちは物質的に非常に恵まれていると誇っていたことが記されています。このラオデキヤという町は紀元60年あるいは61年に地震によって崩壊しています。ネロが死んだのは68年ですから、大体6～7年の間にこの町が繁栄したと想像することは難しいです。もっと長い時間が必要であったように思います。

ですから、このようなことも含めて、この黙示録が記されたのはドミティアヌスが亡くなる年、大体95～96年頃であろうと思います。

5. この書の目的

何のためにこの書が記されているのか？実は、これが最も大切なことなので、ぜひ、皆さん覚えてください。この主が書かれた目的は「教会を励ますため」です。というのは、この当時、教会は様々な問題を抱えていました。あのすばらしい働き人であるパウロは殉教しました。ペテロもそうでした。教会の中には様々な偽りの教えが入り込んで来ました。教会の中にはいろいろな罪が広がっていました。また、主に対する愛にも問題が生じていました。たとえば、エペソの教会がそうでした。しっかりとした教理に立った、教理をしっかりと教えられた教会でしたが、主に対してかつて持っていた最初の愛が冷えてしまったということが非難されています。いろいろな問題を抱えていた教会にこのメッセージが届けられたのです。迫害下にある教会に対して、神の預言しておられたさばきが近いから、しっかりと歩み続けるようにと、教会のクリスチャンたちを励まそうとしたのです。

ですから、この黙示録の中には多くの励ましがあります。こういうことが起こるのだから、こういうことが約束されているのだから、こういうことが私たち信仰者には約束されているのだから、しっかりと立って歩み続けていきなさいと、そのことをこの黙示録は教えています。

さて、私たちはこの書の解釈をしていきます。でも、皆さんも黙示録を読まれて気付かれたと思いますが、ここには大変多くの象徴が記されています。見ていくと、どういう意味だろうと思うことがたくさんあります。非常に解釈が難しいと。そこで、ある人たちが考えたことは、この書の解釈は他の65の本に比べて異なった解釈法を用いなければならないということです。ということで、ある人たちは寓意的解釈、アレゴリーを使った解釈であったり、また、霊的解釈を試みようとしています。しかし、私たちが覚えなければいけないことは、神が与えられたみことばに対する解釈のアプローチは、字義的、つまり、文字通り取ること、また、歴史的、書かれた時代や環境や事情を考えてその意味を理解すること、また、文法的原則に基づいたものでなければなりません。つまり、他の65の本と同じようにこのみことばを解釈しなければいけません。

ですから、そのような原則に基づいてこの黙示録をしっかりと見て、この中に記されているすばらしい神のメッセージをごいっしょに汲み取っていきたいと願います。

B. 神からの祝福 3節

ここには、神からの祝福が記されています。3節に「この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを心に留める人々は幸いである。時が近づいているからである。」と、「幸いである。」ということばがあります。神の祝福のことです。神はこういう人たちを大いに祝福してくださるということです。

◎祝福を受ける人とは？

1. 預言のことばを朗読する者

この「朗読する」という動詞、このことばの意味は、恐らく、教会の中や会衆の前で朗読すること、しかも、大きな声で朗読するということです。しかも、この動詞が単数で書かれていることは、その当時、今私たちが持っているように、多くの聖書がなかったということです。一冊しかなかったのかもしれない。それをこの人は会衆の前に立って大きな声で朗読する、これが神のメッセージだと朗読する者、その人が祝されるということです。

2. それを聞いて

みことばを心から聞くのです。ただそこに座っているだけでなく、神が語られるメッセージとして受け留める人たちです。そういう人たちを神は祝してくださるのです。

3. そこに書かれていることを心に留める人々

「心に留める」、実は、新改訳聖書はこのように訳していますが、残念な訳です。ここで使われている動詞は「継続して命令に、また、律法に従う」という意味をもっています。このことばは新約聖書に70回出て来ます。確かに、黙示録では「心に留める」と訳されていますが、他の箇所ではどうでしょう？いくつかの例を言います。ヨハネ14：15には「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」と、Iヨハネ2：3、4、5では「もし、私たちが神の命令を守るなら、

それによって、私たちは神を知っていることがわかります。：4 神を知っていると言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。：5 しかし、みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります。」と、いずれも「守る」と書かれています。

「聞いたことを心に留める」というと、聞いたことを一生懸命憶えるように、それを忘れないようにとされているように思いますが、ここで言われていることは「あなたが聞いた神のことばを実践しなさい」ということです。それがこの「そこに書かれていることを心に留める」ということばが教えていることです。初めに、新改訳聖書だけが「心に留める」と訳していると言いましたが、口語訳聖書は「この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは幸いである。」とあります。新共同訳は「この預言のことばを朗読する人と、これを聞いて、中に記されたことを守る人たちとは幸いである。」と、ここも「守る」と訳しています。文語訳聖書は「この預言のことばを読む者と、これを聞いて、その中に記されたることを守る者どもとは幸いなり。」となっていて、みな「守る」と訳しています。残念ながら、新改訳聖書だけが「心に留める」と訳したのです。ですから、「神のことばを心に蓄えておく、憶えておく」と、そのような意味ではありません。

神はどのような人を祝してくださるのか？聞いた神のおことばを実践する人です。今挙げた「朗読する人たち」「聞く人たち」、そして、「行なう人たち」と、この三つの動詞はすべて現在形です。ですから、神はこのような人を祝福しますと言われています。その人は、継続して神のおことばを—特にここでは黙示録ですが—読み続ける人であり、それを聞き続ける人であり、それを守り続ける人です。このような人を神は祝されると言うのです。

神学者バークレーはこのように言っています。「神のことばを聞くのは特権であり、それを守るのは義務である。みことばを聞いて忘れる者、また、敢えて、無視する者は真実のクリスチャンではない。特権には責任が伴う。みことばを聞く特権には、それを覚えて守る責任が伴うのである。」と。ですから、みことばを聞いてそれで終わりではない、聞いたなら、守り行なっていく、実践するという責任が伴っていると、そのことは私たちは様々なみことばの教えからこの場でも何度も学んで来ました。

どうぞ、信仰者の皆さん、覚えてください。どの箇所を見てもみことばが私たちに教えることは、神があなたを確実に祝してくださる、でも、そのためにはあなたが祝福を受けるにふさわしい者でなければいけないということです。それは、神のことばを聞いてそのみことばに従って生きる人です。神は私たちを変えていってくださるけれど、そのために必要なことは、聞くだけでなく、それを実践することです。そのときに、神があなたのうちに働くのです。黙示録もまさに、そのことを私たちに教えてくれています。

しかも、3節の終わりに「時が近づいているからである。」とあります。ヨハネは言います。「信仰者である皆さん、もう無駄にする時間は残っていません。神が言われたそのさばきが近づいている。その日が真近だ。いつまで時間を無駄にするのか？いつまで神がくださった機会を無駄にするのか？」と。主が望んでおられることを今しないでいつするのですか？今すぐ、私たちは主が喜ばれることを始めていくことです。そのことをヨハネはこの3節で教えるのです。

C. 教会への励ましのメッセージ 4－8節

4－8節、残念ながら、今日はすべてを見ることはできませんが、ここには「教会への励ましのメッセージ」が書かれています。最初にも言ったように、この書は教会を励ますために書かれました。3章の終わりまで、七つの教会へのメッセージがあります。そして、4－19章はその後のことです。キリストが再臨された後のことです。まさに、私たちが一番知りたいと思っている未来について、この書は私たちに明らかにしてくれています。

1. 七つの教会への祝福 4, 5節

まず、4－5節には「七つの教会への祝福」が記されています。「：4 ヨハネから、アジヤにある七つの教会へ。今いまし、昔いまし、後に来られる方から、また、その御座の前におられる七つの御霊から、：5 また、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安が、あなたがたにあるように。イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、」と、まさに、祝福であり、挨拶ともいえるものです。というのは、この「恵みと平安」はパウロ自身もよく用いた挨拶だからです。パウロ書簡13のうちの10はこの挨拶を使っています。この挨拶が見られないのは、テモテへの手紙第一、第二、テトスへの手紙、牧会書簡と言われるこの三つです。

「恵み」：ギリシャ人がよく用いた挨拶です。これは、私たち信仰者に与えられた神のご好意です。神が私たちに与えてくださったもののどれを見ても、私たちが受けるにはふさわしくないものです。だから、恵みです。神はすべての人にすばらしい祝福を与えてくださっています。そして、私たちクリスチャンには特別な祝福が与えられています。今、そのすべてを明らかにする時間はありませんが、少な

くとも、私たちは分かっています。私たちクリスチャンに神が与えくださった祝福、永遠のいのちも罪の赦しも神が私たちに内住してくださっていることも、すばらしい祝福のすべては神の恵みであると。

「平安」：これはユダヤ人たちの間で用いられている挨拶です。よくご存じのように「シャローム」です。旧約に見る一般的な挨拶です。これは、相手の幸せや相手の健康を願う意味があります。マスターズ神学校のトーマス教授は「クリスチャンたちにとってはこの「平安」はより深い意味がある。クリスチャンはキリストによって神との平和をいただき、その神から心に本当の平安をいただいて日々を過ごすことが出来るから。」と。つまり、このような挨拶をクリスチャンでない人たちも口にしていたのですが、私たちクリスチャンがこのことばを口にするときは、もっと重みがあるのです。

神から恵みがあるように、神から平安があるようにと、その挨拶を聞いたときに、恐らく、この読者たちは大きな励ましをもらったことでしょう。なぜなら、私たちがこの地上にあって神に喜ばれる生き方をするためには、確実に、神の助けが必要です。それを「神の恵み」と呼びます。私たちは神に喜ばれる生き方を自分の知恵や力でできるか？不可能です。神の助けが必要です。それが「恵み」です。そして、「平安」、神が約束された平安はどのような状況にあっても変わることのないものです。

これは単なる挨拶ではありません。私たち信仰者に必要なものです。なぜなら、迫害下にあった読者たちには、神の恵みと平安は何よりの励ましであったからです。その中にあっても信仰がぶれることなく主に従い続けるためには神の恵みが必要であり、どんな時にも、どんなに辛く苦しいときにもその心が常に神の平安に満たされるようにと、彼らにはこのメッセージが大きな励ましとなったのです。神からあなたがたに恵みがあるように、神からあなたがたに平安があるようにと。

2. 三位一体の神からの祝福 4, 5節

何となくヨハネがそのように言ったのではありません。三位一体の神からこのような祝福が与えられると言うのです。ご覧ください。三位一体の神が記されています。

1) 常にいまし、昔いまし、後に来られる方：「常にいまし」、常に存在している、「昔いまし」、過去にもおられた、「後に来られる方」、未来にもおられると、時間を超越した永遠なるお方である、永遠の父です。父なる神のことです。このお方はこのような祝福を与えることができる方だと言います。

2) 御座の前におられる七つの御霊：これは聖霊なる神のことです。この表現は3：1、4：5、5：6にも見ることができます。「『神の七つの御霊、』」とあります。恐らく皆さんも、これが「聖霊」であるなら、どうして七つと書かれているのか？聖霊は一つではないか？と思われるでしょう。このような表現をしたことには理由があります。先ほども見たように、この黙示録の特徴は「隠されていたことを明らかにすること」でした。旧約聖書の時代に隠されていた真理が明らかにされるのです。

ですから、この黙示録は全部で404節あり、そのうちの278節が旧約の預言的真理に言及しているのです。なぜ、ここに「七つの御霊」と書かれているのか？それを理解するためのヒントが実は旧約聖書のゼカリヤ書にあります。ゼカリヤ書4：1－10をご覧ください。1節に「私」とあるのは「預言者ゼカリヤ」のことです。御使いとゼカリヤの会話が記されているのです。「：1 私と話していた御使いが戻って来て、私を呼びさましたので、私は眠りからさまされた人のようであった。：2 彼は私に言った。「あなたは何を見ているのか。」そこで私は答えた。「私が見ますと、全体が金でできている一つの燭台があります。その上部には、鉢があり、その鉢の上には七つのともしび皿があり、この上部にあるともしび皿には、それぞれ七つの管がついています。」、ゼカリヤは燭台を見ていたのです。その燭台の説明が「七つのともしび皿があり」とあります。ここで黙示録4：5を見てください。「御座からいなずまと声と雷鳴が起こった。七つのともしびが御座の前で燃えていた。神の七つの御霊である。」とここにも「七つのともしび」とあります。象徴が非常に似通っています。

ゼカリヤ4：10には「：10 だれが、その日を小さな事としてさげすんだのか。これらは、ゼルバベルの手にある下げ振りを見て喜ぼう。これらの七つは、全地を行き巡る【主】の目である。」、「これらの七つは、全地を行き巡る【主】の目である。」とあります。黙示録に戻って、5：6には「さらに私は、御座——そこには、四つの生き物がいる——と、長老たちとの間に、ほふられたと見える小羊が立っているのを見た。これに七つの角と七つの目があった。その目は、全世界に遣わされた神の七つの御霊である。」とあります。旧約聖書で教えられていることを黙示録に見ているのです。隠されていることが明らかにされます。

ゼカリヤ書をもう一度見てください。4：3－9「：3 また、そのそばには二本のオリーブの木があり、一本はこの鉢の右に、他の一本はその左にあります。」：4 さらに私は、私と話していた御使いにこう言った。「主と、私は言った。「主よ。知りません。」：6 すると彼は、私に答えてこう言った。「これは、ゼルバベルへの【主】のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の【主】は仰せられる。：7 大いなる」ら石を運び出そう。」：8 ついで私に次のような【主】のことばがあった。：9 「ゼルバベルの手が、この宮の礎を据えた。彼の手が、それを完成する。このとき、あなたは、万軍の【主】が私をあなたがたに遣わされたことを知ろう。」

ゼカリヤはこれらを見て何のことが全く分からなかったのです。4：4に「主よ。これらは何ですか。」と質問しています。御使いは「これは、ゼルバベルへの【主】のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の【主】は仰せられる。」（6節）と答えています。何のことでしょう？これはエルサレムの城壁の再建のことです。ゼルバベルはそのリーダーでした。そのゼルバベルに主はこのように言われます。「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって」と、つまり、人間の知恵や力で為してはならない、これは「わたしの霊によって」と、神の働きによって為されなければならないと言うのです。そのことが実はゼカリヤ書の4章に見ることができるのです。この「わたしの霊」とはだれを指しているのか？そして、黙示録を見るとき「七つの霊」とはだれのことなのか？これは「聖霊なる神」のことです。旧約のときにははっきり分からなかったのでしょうか。でも、今、私たちはこうして聖書を見ることによって、何を言わんとしていたのか？そのことを見て取ることができるのです。

ですから、「聖霊なる神のこと」を言ったのです。黙示録1：4の後半「…また、その御座の前におられる七つの御霊から、」、聖霊なる神からこの祝福が与えられるということです。

3) 忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリスト

これは主イエス・キリストのことです。5節に「忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから」と書かれています。だから、三位一体なのです。父なる神がいて、聖霊なる神がいて、そして、子なるイエス・キリストがいる。この三位一体の神からこの祝福が与えられるとヨハネは言うのです。そして、ここにはイエス・キリストに関して三つの説明が記されています。

◎イエス・キリストに関する三つの説明

・**忠実な証人**：主イエス・キリストは地上におられたとき、常に真実を語られた、「わたしはが道であり、真理であり、いのちなのです。」（ヨハネ14：6）と、イエスのことばの中には何一つ偽りはなかったのです。真実な証し人、証人として真実だけを語り続けて来られたのです。

・**死者の中から最初によみがえられた方**：主イエスの前に、たとえば、旧約聖書の中には死からよみがえって来た人はいます。また、主イエスが地上におられたときにイエス・キリストは死人をよみがえらせるわざをされました。見て来たように、ラザロもそうでした。そうすると、「最初によみがえられた」というのは当たらないと思いますが、これはよみがえりの順序のことではありません。

ここで教えていることを知るには、ここの並行箇所を見ると分かります。コロサイ1：15と18に書かれています。「15 御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。」

「18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。…」と、どういう意味なのか？続いて説明が加えられています。「…こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。」と、つまり、ここで言われていることは、主イエス・キリストは永遠に存在される方であり、イエス・キリストは比類なきお方である、すべての被造物に優るお方であるということです。ですから、どの順序でよみがえって来たかなどということではないのです。よみがえったもののの中で最も優れたお方、最も偉大なお方であるということです。

・**地上の王たちの支配者**：すべてのものを支配しておられるお方です。だから、イエスは「唯一の主権者、王の王、主の主」と呼ばれるのです。1テモテ6：15に「その現れを、神はご自分の良しとする時に示してください。神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、」と、また、黙示録17：14にも「この者どもは小羊と戦いますが、小羊は彼らに打ち勝ちます。なぜならば、小羊は主の主、王の王だからです。また彼とともにいる者たちは、召された者、選ばれた者、忠実な者だからです。」、19：16「その着物にも、ももにも、「王の王、主の主」という名が書かれていた。」とある通りです。これがイエス・キリストだと言うのです。イエスに優るものはどこにも存在していないのです。この方は「王の王であり、主の主である」と、ヨハネはそのことを記して、このイエスからあなたがたにはすばらしい祝福が与えられると言うのです。

迫害下にいたこのクリスチャンたちにヨハネは言います。父なる神から、聖霊なる神から、子なる神から、あなたがたには必要な恵みと平安が与えられると。彼らはこうして大変な励ましを受けたのです。そして、この後、今日はもう見ることはできませんが、ヨハネが教えることは、主がどんなにすばらしい祝福をもうすでに私たちに与えてくださったのか？そのすばらしい主が約束されたことは、私たちを迎えに来てくださることである。そして、このすべてのことは神が約束されたことであるから、しっかりそれを覚えなさい。どんな祝福をいただいたのか、その主がもう間もなく私たちのところに帰って来てくださる、そして、すばらしい祝福、すばらしい約束はすべて神から与えられたものだと言うのです。このように、大変な困難の中にいる人たちに対して、苦しみの中にいる人たちに対して、あなたがたの目を主に向けなさい、そこに希望がある、そこに勝利があると言うのです。

そうして、初代教会の人たちは生きていたのです。時代がどうあれ、生き方に変わりはありません。

どんなときでも私たちが為すべき歩みは主を見上げることです。そのときに私たちの心に希望が出て来ます。なぜなら、神が約束されたことは神がされたのです。人間の約束ではないからです。どうぞ、そこにしっかりと希望を置いて、主に従い続けてください。神に従う者たちを神は大いに祝してくださるのです。そのような信仰者としてこの一週間も歩んでください。

《考えましょう》

1. 「黙示」とはどういう意味ですか？
2. この黙示録が記された理由を書いてください。
3. 神の祝福を受けるための条件を挙げてください。3節
4. どうして「その人」が祝福されるのか？その理由を書いてください。